

を併用しながらテデュグルチドを継続し、月齢9で-1.0SDまでキャッチアップした。テデュグルチドは高額でもあり適応が難しい場合もあるが、経腸栄養のみでの体重増加が困難な短腸症乳児への使用は考慮され得ると思われた。

4. 手術準備の円滑化と搬送時の役割明確化に向けた取り組み

～PICU手術準備チェックリスト、搬送時アクションカードの作成～

福島県立医科大学附属病院 PICU

野地 亨平, 田巻 悠子, 菅野智成実
松井沙耶香, 石川 愛里, 宮本 祐子

当院PICU(小児特定集中治療室)は、幅広い年齢の小児重症患者が入室しており、生命維持に関わる全身管理を目的として、人工呼吸器や循環作動薬・鎮静薬などの薬剤投与、厳密なモニタリング観察といった集中的な治療が行われている。急性期にある患者は、状態が刻々と変化する中でも手術や検査に出棟しなければならない。年齢や疾患、状態に合わせた準備や搬送が必要となるが、PICUでは手術後の帰室件数と比較し、手術出棟の件数は少ないため、手術準備と出棟に不慣れなスタッフが多い。また、挿管管理中で多数のデバイス類があり、全身状態が不安定な患者を距離のある手術室まで安全かつ迅速に、搬送することが必要である。しかし、役割の不明確さや医療者間のコミュニケーション不足により準備に時間がかかり、入室時間に遅れることがあった。そのため、誰もが安全かつ迅速に、手術出棟できるような体制づくりに取り組んだため、ここに報告する。

5. 入院中の患児と家族へのストレス緩和の試み ～かき氷提供イベントを開催して～

太田綜合病院太田西ノ内病院 4階B病棟

國分 美香, 舟橋なつみ, 飯村 亜以
中山 美幸

本来入院患児に家族の付き添いは必要ないが、ほとんどの家族が子どものことが心配であることを理由に付き添いしている現状がある。2023年の夏は猛暑で院内設備の老朽化もあり、室内でも気温が高い状態であった。小児科医師からの提案もあり暑さ対策と、患児と家族のストレス緩和、ホスピタリティの充実を目的にかき氷提供イベントを開催した。このイベントを通して子どもと付き添い家族の入院中

のストレスを緩和させるにはどのような支援を行ったらいかが示唆を得たいと考えた。かき氷の提供は患児と付き添い家族のリフレッシュとなり、入院中であっても快適な環境作りができホスピタリティの充実に繋がった。辛い思い出が多い入院生活において楽しい思い出を残すことができ、暑さ対策や付き添い家族のストレス緩和に繋がったと思われる。病院は辛い思いをする場所だけではないと思ってもらえるように、今後も子どもの笑顔を引き出せる関わりをしていきたい。

6. 保護者同伴手術入退室のDVDとパンフレットの再考

～保護者の不安軽減を目指して～

いわき市医療センター 小児病棟

伏見 優希, 山倉 望, 根本 恵美

当院小児病棟では患児と保護者の分離不安を軽減するため、生後6ヶ月～15歳以下の患児を対象に保護者同伴での手術入退室を実施している。保護者同伴手術入退室の説明は、7年前に作成された旧病院のDVDとパンフレットを用いている。しかし、現在の環境と異なることで保護者が内容を理解しにくく、手術室入室を正しくイメージできないため、不安があるのではないかと考えた。そこで、DVDのナレーションにテロップを加え、現在の状況に合わせて修正した。またパンフレットは、手術直前まで保護者の手元に置き、いつでも見返せるようにした。DVDの視聴とパンフレットの使用により、保護者から不安の声はなく、心構えができイメージ通りの同伴ができてよかった、という意見が得られた。DVDとパンフレットを修正することで、保護者が同伴の流れを正しくイメージでき不安の軽減につながったのでここに報告する。

7. 退院後の生活を見据えたケア方法の確立

～胃瘻周囲皮膚炎をもつ患児への関わりから～

福島県立医科大学附属病院 みらい棟5階病棟

佐藤 涼子, 紺野 美和, 佐藤 範子
細川 裕子, 五十嵐瑞穂, 高野由利江

患者は、胃食道逆流・腸回転異常症の既往があり、胃内の減圧を目的にGB胃瘻バルーンカテーテルボタン型が挿入されている。数年前から胃瘻周囲皮膚炎を繰り返していたが、今回、胃瘻挿入部から胃液や薬剤の漏れがあり、重篤な胃瘻周囲皮膚炎を来していた。患者の入院経過には1.皮膚の安静を最優